News letter

噴火湾文化

【Funkawan Culture】

2013. 3 Vol. 7

Date City Institute of Funkawan Culture

伊達市噴火湾文化研究所

●第７号目次

■インタビュー「*Fieldworker*」

【考古】動物考古学の原点
国立歴史民俗博物館・教授　西本　豊弘…… 3

■研究報告

【考古】「伊達市ポンマ遺跡
― 有珠地区における近世アイヌ民族の
土地利用の変遷と災害の影響 ―」
伊達市噴火湾文化研究所・埋蔵文化財専門委員
永谷　幸人…… 6

【博物館学】「新しい博物館に向けて ～自然系ソフト事業の開発の一例～
市民協働による自然史標本の収集と活用」
伊達市噴火湾文化研究所・学芸員　羽馬　千恵…… 10

■伊達の自然　コラム①

「善光寺自然公園におけるエゾタヌキの糞内容物」
伊達市噴火湾文化研究所・学芸員　羽馬　千恵…… 13

■教育実践

【絵画】「ロシア雑感」
広島市立大学芸術学部・准教授　森永　昌司…… 14

表　紙
野田弘志　「TOKIJIKU（非時）Ⅶ Pyramid」 1992
〔162.1×130.3　油彩　一番星画廊蔵〕

Fieldworker

『動物考古学の原点』

国立歴史民俗博物館　西本 豊弘 氏

西本豊弘（にしもと　とよひろ）
国立歴史民俗博物館教授。
1947年生まれ。大阪府大阪市出身。
著書：「人と動物の考古学」、
「衣食住の歴史」他。

第７回目の「Fieldworker」は、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生です。西本先生は、動物考古学を専門にされており、伊達市北黄金貝塚で出土した動物骨の同定作業をされています。動物考古学に出会ったきっかけや北海道の貝塚の魅力を伺いました。

― 先生が動物考古学と出会ったきっかけは？

早稲田大学に入った頃、僕は考古学ではなくて東洋史学を専攻していたんですが、当時は学園紛争だったので授業が少なかったのです。それで、発掘によく行くようになりました。最初は、古代の寺院や集落を掘っていたのですが、貝塚に連れて行ってもらったら骨が沢山出てきて面白かったんです。それで３年生になる頃には、東洋史から考古学に転向してしまったんです。当時、僕の先生は西村先生といって、５月と11月の連休には必ず貝塚を発掘されていました。最初は気楽に行っていたのが、毎年の発掘に参加するようになりました。

貝塚を発掘すると土器や骨が出てきます。動物骨を専門とされていた金子浩昌先生（早稲田大学）に「これは何ですか？」と尋ねると、「シカの上腕骨だよ」と答えてくれる。で、１０分くらいしたら、また骨が出てきて、「これは何ですか？」と金子先生に訊くと、先生はまた「シカの上腕骨だよ」と言うんです。自分では全く別の骨を尋ねているつもりだけど､先生は同じ骨だと言う。それが何回も続いて、終いには怒られる。これではダメだと思って、2年生から3年生になる春休みに金子先生の研究室に行き、骨を教えて下さいとお願いしたのが動物考古学を始めるきっかけだったんです。金子先生に骨を尋ねると、小さな骨でも「スズキだよ」とか言われるわけですよ。これが不思議だった。単純ですけど。

縄文時代の遺跡を発掘すると土器が沢山出てきます。しかし僕はどうしても土器は好きになれなかったんです。土器の専門家は今でも沢山いるけど、動物の方に興味を持ったのは、もともと動物が好きだったからかもしれません。

遺跡から出土した動物骨を同定している

―動物考古学となると、標本作りなど発掘以外の仕事もありますよね？

僕は自宅が大阪市で旧淀川が近くを流れており、その近くにイノシシの肉屋さんがありました。店の近くを歩いていると今では考えられないのですが、イノシシが転がってるんですよ、大阪の真ん中で（笑）。それで、イノシシの頭を最初に買って、自分でドラム缶でゆでて標本にしたんです。家の庭で煮たから、獣の臭いがすごくてえらく怒られましたけど（笑）。それから、店の人と何度も話しをして、標本にするからと説明して、頭の骨や１体分の骨をもらえるようになりました。イノシシ以外でもずいぶんと標本を作りました。遺跡から出るありとあらゆる骨を同定するには標本が必要だったから、全て自分で作ったんです。それは基本ですね。

―北海道にいらしたきっかけは？

大学の４年が終わった時に、金子先生にあちこち連れて行ってもらって骨を分類しました。その時に骨が沢山あるよと言われて北大に連れて行ってもらったのが最初です。北大の北方文化研究施設には海棲哺乳類の骨が山のようにあったんです！オットセイとか。それで感激しちゃった。翌年には北大に研究生で入って、礼文島の香深井Ａ遺跡の発掘にも行きました。北方文化研究施設では遺跡から出土した海獣骨や魚骨を毎日分類していました。その頃、北大の歯学部に大泰司紀之先生がおられて、その先生の研究室で色んな動物の標本作りをしていました。僕もそこで標本作りを教えてもらいました。僕は北大の文学部に籍がありながら、半分以上は歯学部にいたんです。北大の大学院に入るまで、４年かかりましたが、その間は発掘と遺物整理と標本作りばかりやっていました。北大のヒグマ研究会の学生とも知り合いになり、動物生態を教えてもらいました。今から考えたら、一番勉強した時期です。

―オットセイは捕獲が禁止されていますが、どのように入手したのですか？

オットセイは特別天然記念物だから捕獲できなかったんです。それで、太泰司先生に紹介してもらって静岡県清水市の遠洋水産研究所を訪ねていったんです。そこにはオットセイ研究室があり、和田一雄さんという研究者がおられたのです。和田さんは、当時、海棲哺乳類の研究者の中心の一人で、オットセイの生態について親切に教えてくださいました。また、海獣談話会という研究会を紹介していただき、そのおかげでトドやアシカ、アザラシの研究者と知り合いになりました。北大水産学部の先生からはホッケやニシンやマダラなどの生態を教えていただきました。実際にフィールドで動物を観察している研究者は実にフランクで、門外漢の私に親切に動物の情報を教えてくださるので、このような研究者もおられるのかと感激しました。そして、魚類や鳥類やクジラなどいろいろな専門の研究者が海獣談話会で議論をしているのを見て、広い視野が必要とつくづく感じました。この経験が私の研究姿勢の基礎になったと思っています。

―札幌医科大学に行かれた経緯は？

それは簡単で、職が無かったからです。大学院の博士課程になって、３０歳前後の頃に、職を探していましたが、その頃におられた札幌医科大学の百々幸雄さん（現・東北大学大学院名誉教授）と知り合いになって、助手に受け入れていただいたのです。札医大での2年間も大変勉強になりました。それまで、北大の歯学部の太泰司先生のところで歯の成長や摩耗のことを学んでいたのですが、人骨の成長プロセスや成育異常などの変異を解剖学の先生たちから学びました。この二つの研究室の経験がなかったら、弥生時代のブタを認定することはできなかったでしょう。

―色々な貝塚を発掘されていますが、北黄金貝塚を発掘した印象は？

関東の貝塚は、貝殻ばかり出てきて骨がほとんど出ない貝塚が多いのです。それに比べて、北黄金貝塚は骨の宝庫だった。ウバガイ・ハマグリなどの貝殻だけではなく、シカやオットセイ、ソイやヒラメ・カレイなどの魚骨も出てくるから非常に面白いです。出てくるものが、非常にバラエティがある。お世辞じゃないけど、関東から北海道までの貝塚を掘っていて、噴火湾は寒流と暖流のぶつかり合う場所ということもあって、北黄金貝塚は一番面白い貝塚です。寒流や暖流の魚類と海獣骨が沢山出てくるということは、それだけデータが豊富であり、いろいろなことが分かるのです。

―年代測定など色々なことをされていますが、その中で専門の動物考古学があるのですね。

僕の専門は動物考古学だから、骨が出ると言われ

たらアラスカでもどこでも行きました。だけど、基本的には、縄文文化が自分の専門分野だと思っています。それと人間のことを中心において研究しているということです。僕は自分の専門分野を「動物考古学」と名付けたけれど、「考古動物学」とは絶対にしなかったんです。あくまでこの分野は人間の歴史を考える考古学だという考えだからです。ヨーロッパでは、ズーアーキオロジーとアーキオズーロジーの二つの流れがあるんですけど、僕は前者をとった。ズーロジーとすると動物学になってしまうから。僕は考古学の人間であって動物学の研究者ではないという意識がずっとあるんです。だから、僕は年代測定にも興味があるし、植物にも手を出すんです。最近、「人と動物の考古学」という本を出しましたが、どうしても「人」を入れるのが僕の主義なんです。

―フィールドとしての北海道の魅力は？

礼文島の香深井A遺跡というオホーツク文化の遺跡で、魚骨層というのを初めて見て驚きました。掘っていると魚の椎骨がずらっと繋がって１匹分出てくる。断面を見ると頭から尻尾まできれいに繋がっているんです。北海道のフィールドの魅力は骨の保存性が良いところだと思っています。

―発掘の仕方は昔と変わりましたか？

昭和46年に僕が北大に来たときに、大井晴男先生にオホーツク文化の香深井Ａ遺跡の発掘に参加させていただきました。その頃、こういう方法で発掘したら面白いとか、こうやったらカロリー計算ができるという風に考えていました。その当時、大阪でオホーツク文化の展示があって、その展示ではオホーツク文化は海獣狩猟で主な食料を得ていると解説されていました。僕はそのことに疑問を持っていたんです。海獣に依存するなんて、あんな不安定な資源ばかり食ってたわけじゃないと思っていました。動物遺体からカロリーを計算したりして、客観的なデータからオホーツク文化の解釈を覆したかったのです。

―科学的な手法を発掘調査に取り入れたのですね？

そうです。魚類、哺乳類、海獣類と、それぞれを食料とした場合に得られるカロリーをきちんと評価して、それをもとに文化を明らかにするというのが僕の発想なんです。それで、香深井Ａ遺跡の発掘で、このような計算ができるように魚骨層の柱状サンプルを取りたいと大井先生に頼んだのです。それを許可していただいたことは大変驚きました。私は北海道に来たばかりの単なる１学生でしたから。その頃は、私だけじゃなくてみんな新しい発掘方法を学ぼうとしていました。アメリカとかヨーロッパの方法論が注目されていましたから。まあ、大学院に入る前から自由に研究させてくれたのです。現在の研究のほとんどは、当時の経験が基礎になっています。

―先生は今年３月に国立歴史民俗博物館を退職されますが、今後は？

退職したら、考古学は全部やめようと思っていましたが、辞められなくなりました。次から次へと仕事が入ってきて、断りきれなかったのです。それと、まだ分類していない資料があり、仕事をすべてやめるわけにはいかないことが分かったのです。もう２、３年はやろうかなと思っています。一つは、中国の仕事で自分がやり残したことがあります。弥生時代のブタの問題です。僕は弥生時代のブタを研究してたんですが、最近、僕の研究結果を否定する意見も出てきて、こりゃいかんということになって、もう一回、ブタを研究しようと思っています。家畜化現象をもう少し皆さんに知っていただきたいと思っています。

それと、貝塚研究を新たに行う必要性を感じています。その研究の一つとして北黄金貝塚を中心とした研究をやりたいと思っているのです。

―今の若い研究者に一言

僕は魚も哺乳類も全ての骨を扱ってきて、無駄なことをいっぱいしてきました。でも、最近の若い研究者はそれをやらない。今は、専門が細分化しているから、動物の中でも海獣しかやらないとか魚しかやらないという人が多い。また、確立された学問の枠の中で小さいテーマしかやらない人が多くなっています。これはすぐに成果を求める時代だから仕方がないけれど、全ての動物にも目を配る必要があります。魚類だけや鳥類だけ分類しても、それを利用した人間になかなか接近できないのです。様々な動物群をある程度分類できなければ、考古学での人間と動物との関係は分からないのではと思っているのです。

そして、最後に言いたいことは、動物考古学は、それだけでは時期も決められません。だから、発掘を行う考古学研究者との共同研究は不可欠です。また、人や動物は植物を食べているわけですから、植物考古学者との共同研究も必要です。動物考古学は単独では成り立たない研究分野です。このような視点も忘れないでほしいものです。

インタヴューアー：青野友哉

研究報告
【考　古】

伊達市ポンマ遺跡
－有珠地区における近世アイヌ民族の土地利用の変遷と災害の影響－

伊達市噴火湾文化研究所・埋蔵文化財専門委員　永　谷　幸　人

有珠地区ポンマ遺跡の発掘調査

伊達市の北西端にあたる有珠地区には、有珠４遺跡やカムイタプコプ下遺跡など、近世アイヌ文化期の重要な遺跡が多数点在しています（図１）。そのなかの一つであるポンマ遺跡において、2012年夏に伊達市噴火湾文化研究所による発掘調査が実施されました。

この調査では、近世アイヌ文化期のチセ（アイヌ民族の住居）跡や墓、貝塚、畑跡など、ひとびとの生活に関わる遺構がセットで見つかりました。また、こうした遺構とともに、17世紀の有珠地区を襲った二度の大災害（1640年の駒ヶ岳噴火津波と1663年の有珠山噴火）の痕跡も見つかりました。

これらの成果から、有珠地区の近世アイヌ民族の暮らしぶりや、土地の使い方、さらには災害に向き合ったひとびとの姿の一端をうかがい知ることができましたので、紹介したいと思います。

図１　ポンマ遺跡の立地と周辺遺跡

災害痕跡による時期区分―駒ヶ岳噴火津波（1640年）と有珠山噴火（1663年）

近世アイヌ文化期（17世紀）の有珠地区は、1640年の駒ヶ岳噴火およびそれに伴う津波と、1663年の有珠山噴火という二度の大災害に見舞われたことが文献記録（『新羅之記録』）によって明らかとなっています。

有珠地区の遺跡からは、こうした大災害の痕跡として火山灰や津波堆積物が検出され、墓や貝塚などの遺構は、こうした災害痕跡との新旧関係から、駒ヶ岳噴火（1640年）より古いものなのか、駒ヶ岳噴火と有珠山噴火の間（1640～63年）のものなのか、あるいは有珠山噴火（1663年）よりも新しいものなのかを知ることができるのです。

今回の調査では、図２・表１のように遺構が検出されました。まず、時期ごとに概観していきたいと思います。

なお、以下の本文や図の中では、墓を「GP○○○」と表記します。これは、Grave Pitの略と検出順を示す番号を組み合わせたもので、発掘調査時に割り振った遺構ナンバーです。

表１　時期別の検出遺構数

駒ヶ岳噴火（1640年）以前	墓3基	チセ跡2軒
駒ヶ岳噴火～有珠山噴火（1640～63年）	墓2基、貝塚、畑跡	
有珠山噴火（1663年）以降	墓16基	

駒ヶ岳噴火（1640年）以前

駒ヶ岳噴火（1640年）より古い時期の遺構として、GP017・GP020・GP021の３基のアイヌ墓が検出されました。

このうちGP021は３歳前後の小児であることが人類学的な分析によってわかりました。この小児が生前どのような立場であったのかなどを考慮する必要はありますが、近世アイヌ文化期の有珠地区では、少なくとも３歳以上から墓地に埋葬されるものがあらわれ、社会的成員あるいは「この世の者」として認められたのではないかと考えられます（表２）（青野・永谷ほか2012）。

駒ヶ岳噴火～有珠山噴火（1640～63年）

駒ヶ岳噴火から有珠山噴火までの23年間は、この地点が生活域として最も活発に利用された時期だったようです。この時期の遺構として、貝塚や畑跡、墓２基およびチセ跡２軒が見つかりました（図２）。

なお、チセ跡については、いずれも駒ヶ岳噴火お

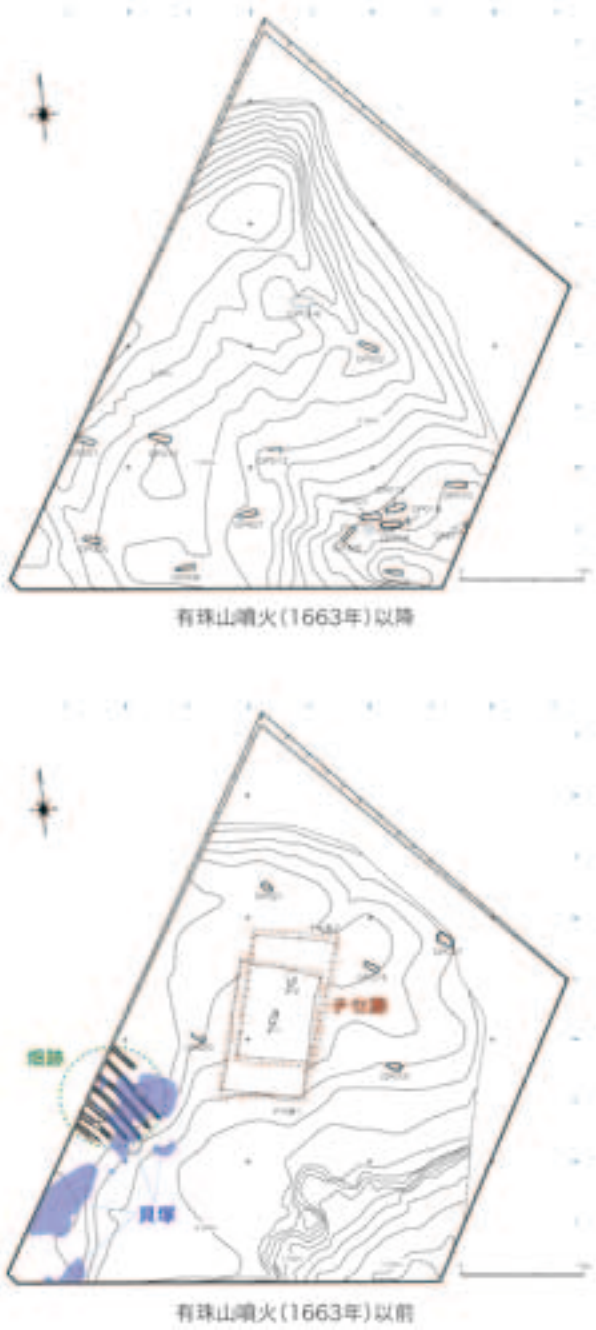

図２　有珠山噴火前後の遺構配置図

よびそれに伴う津波の痕跡との関係が不明であったため、厳密には有珠山噴火（1663年）以前の遺構であることしかわかりませんが、周囲の遺構との位置関係などから、この23年間に該当する可能性が高いと判断しました。

　道南および噴火湾沿岸一帯で確認されたチセ跡は、本例をいれても３軒しかなく（もう１軒はカムイタプコプ下遺跡）、さらに柱穴列の全体像が明らかになった初めての事例であることから、貴重な発見となりました。

　チセ跡の形や大きさは、２軒とも長辺約10m、短辺約6.5mの長方形で、セム（入り口側に設けられる物置を兼ねた前室）は確認されませんでした。チセ内部のやや北寄りの位置から、瓢箪のような平面形を呈する炉が見つかりました。

　この炉の形や、位置、さらには眼前に有珠湾を望むという周辺地形を鑑みると、チセの入り口は北側（有珠湾側）であった可能性が高いと考えられます。その場合、奥壁（南壁）には神窓（カムイが出入りする神聖な窓）があり、神窓側の屋外に、送り場や祭壇などが設けられたことになります。チセの南西側から貝塚が検出されていることから、この貝塚がチセに伴う送り場のような性格を有していた可能性もあります。アイヌ民族の暮らしぶり（生活や信仰）を考えるうえで、このようにチセ跡と貝塚（送り場）とを関連づけて捉えることが重要であると思います。

　貝塚は、有珠山の火山灰で直接パックされていたことから、噴火の直前までに作られたことがわかりました（写真１）。

　アサリが多数を占めますが、ホタテ、イガイ、ウチムラサキ、魚骨など特定の種が集中する箇所も認められました。これは貝類の採取場所や採取時期などを反映している可能性があります。貝塚の縁からは、近世アイヌ民族が狩猟や漁撈に用いた骨角器が出土しています。（図３）。

　また、畑跡は貝塚に覆われた状態で見つかりました。このことは、1640年から1663年の間に、まず畑が営まれ、その後に貝塚が形成されたことを示しています。貝塚の形成期間を考慮すると、畑が営まれていたのは比較的1640年に近い時期であったと考えられます。

写真１　有珠b火山灰下から見つかった貝塚（奥は有珠山）

図3　特定種のブロックと出土遺物

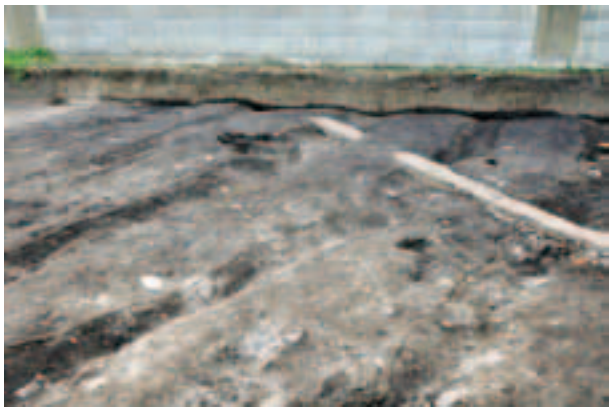

写真2　1640年直後の畑跡（奥壁の土層が波打っているのがわかる）

近年、近世アイヌ文化期の畑跡の検出例が増加し、アイヌ民族の生業のひとつに農耕が含まれることが明らかになってきました。この畑跡も、周囲にアイヌ民族の遺構が多数認められるとともに、和人の生活の痕跡がまったく無いことなどから、近世アイヌ民族によって営まれたものであると考えられます。

また、墓もGP015とGP016の２基が検出されました。いずれも小児の墓で、GP015は９歳前後、GP016は７歳前後です。

丁寧に発掘したところ、この２基は埋葬当時、遺骸の周囲に空間があったことがわかりました。このことは、彼らが成人と同様に木棺に納められて埋葬されたことを示しています（青野・永谷ほか2012）。

先に紹介した３歳前後の小児の墓（GP021）は、木棺を用いない素掘りの墓でしたので年齢によって葬り方が決められていた可能性があります。近隣の有珠４遺跡（US4）で検出された小児墓とあわせて考えると、６～７歳を画期として成人と同様の葬り方をされるものがあらわれたようです（表2）（青野・永谷ほか2012）。

有珠山噴火（1663年）以降

1663年の有珠山噴火より新しい時期の遺構として、アイヌ墓がまとまって検出されました。その総数は16基におよび、検出地点は調査区南側に集中する傾向が認められます。

いずれの墓も墓標穴は見つかっていませんが、重なり合う墓坑がないことから、埋葬後も墓の位置が目に見えて認識できる状態であったと考えられます。

また、調査区の南東部では、４基ほどの墓坑が極めて近い位置関係にあることから、何らかの規則（たとえば世帯や出自など）によってどこに埋葬されるかが決められていた可能性がうかがわれます。

こうしたことから、有珠山噴火以降のこの場所は、単に「墓が集合した場所」なのではなく、「墓地」（「墓地概念」を共有するひとびとによる社会的な空間）として使われた場所であったといえます。

表2　年齢と墓の構造

	墓No.	時期	人骨年齢	墓の構造
PM12	GP021	1640年以前	3 years ± 12 months	素掘り
US4	GP019	1640年以前	3-4years	素堀り
US4	GP023	不明～1663年	5-6years	素堀り
PM12	GP016	1640～1663年	7 years ± 24 months	木棺・木槨構造
US4	GP022	1640年以前	6-7years	木棺・木槨構造？
PM12	GP015	1640～1663年	9 years ± 24 months	木棺・木槨構造

ひとびとは災害とどう向き合ったのか

ここまで概観してきたように、ポンマ遺跡では災害を画期として、遺構の種類・性格が変化していることがわかります。それは、とくに1663年の有珠山噴火の前後において顕著で、有珠山噴火前にはチセや貝塚、畑などが営まれ

る生活空間であったこの地が、噴火後には墓地として利用されるようになったといえます。つまり、火山噴火という大災害が契機となって土地の使われ方が変化したのです。

有珠地区の近世アイヌ史を語る際には、こうした災害がひとびとの暮らしに与えた影響を考慮しなければなりません。それは同時に、有珠山の麓に暮らす私たちの身近な問題でもあります。そこでここからは、有珠地区の近世アイヌ民族が大災害とどう向き合ってきたのかをみていきたいと思います。

冒頭で述べたとおり、この地の近世アイヌ民族を襲った大災害は有珠山の噴火だけではありません。1640年に発生した駒ヶ岳噴火とそれに伴う津波も極めて大きな災害で、とくに津波による被害は甚大であったと文献記録に記されています。今回の調査地点で、津波によって運ばれてきた砂が１～５cm程の厚さで調査区一面に堆積しており、被害の大きさを裏付けています。

しかし、1640年前後の遺構変遷をみると、被災後に貝塚や畑などが営まれており、この地がふたたび生活空間として利用されたことがわかります。

ただ、そのわずか23年後にこれらの貝塚や畑は厚い火山灰によって埋まってしまいます。図２には、有珠山噴火前後の遺構配置と、当時の地形を示す等高線を示していますが、これをみると、とくに調査区南東部の地形が噴火の前後で大きく変化していることがわかります。噴火の前までのこの地点は小さな湾入地形を呈する砂丘で、有珠湾の迫る入江が間近にあったと考えられます。こうした地形が、火山灰の厚い堆積によってあたり一面が平坦な地形になってしまったのです。「景観」が一変したこの地は、生活空間ではなく墓地として利用されるようになりました。チセや貝塚などが作られた生活域は、調査地点の南側の微高地に移ったと考えられます。

ここで重要なことは、有珠地区に生きた近世アイヌ民族が、被災を繰り返しながらも、生活空間を再建したり、土地の使い方を変化させたりすることで、この地を利用しつづけたということです。彼らは決してこの地を放棄することなく、生きつづけたのです（図４）。

このことは、有珠という土地が彼らのアイデンティティにとって、欠くことのできない重要なところだったことを示しているのではないでしょうか。

2011年の東日本大震災以降を生きる私たちにとって大切なことをポンマ遺跡の調査は教えてくれたような気がします。

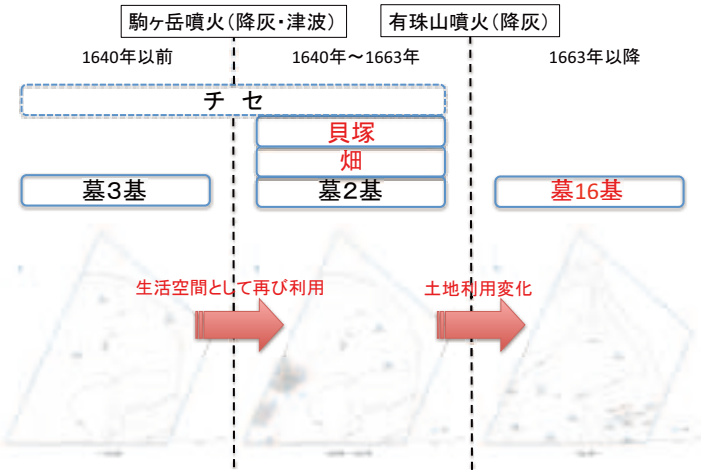

図4　ポンマ遺跡における土地利用の変遷

近世アイヌ墓を調査するにあたって

今回の発掘調査では、多数のアイヌ墓が検出されました。調査に携わった私たちは、これらが深い祈りのこめられた埋葬施設であり、そこに納められているのは350年前にこの地に生きた人そのものであるということを常に心に留め、被葬者へ敬意を払い丁寧に調査をすすめました。調査中には、北海道アイヌ協会伊達支部（山崎よし子支部長）の主催による先祖供養の儀式（シンヌラッパ）が執り行われ、土地所有者や発掘関係者などが参列しました。

なお、今回取り上げられた人骨は、東京大学人類学教室による鑑定後、伊達市噴火湾文化研究所内の専用室にて、丁重に保管されます。

【謝辞】
調査にあたっては次の方々からの協力と調査指導を賜りました。

社団法人北海道アイヌ協会伊達支部；山崎よし子、諏訪野楠蔵、諏訪野義雄、厚真町教育委員会；乾 哲也、奈良智法、北海道開拓記念館；添田雄二、登別市教育委員会；菅野修広、室蘭市教育委員会；松田宏介、洞爺湖町教育委員会；角田隆志、三谷智広　（順不同・敬称略）

【ポンマ遺跡2012年度調査に関連する文献】

青野友哉・永谷幸人・近藤修、2012「伊達市ポンマ遺跡における近世アイヌ文化期の小児の埋葬について」『第66回日本人類学会大会　プログラム・抄録集』第66回日本人類学会大会事務局

永谷幸人・青野友哉・河畑敦史、2012「伊達市ポンマ遺跡－近世アイヌ文化期の墓と生活域の調査－」『2012年度遺跡報告会資料集』北海道考古学会

研究報告
【博物館学】

新しい博物館に向けて
～自然系ソフト事業の開発の一例～
市民協働による自然史標本の収集と活用

伊達市噴火湾文化研究所　学芸員　羽　馬　千　恵

1. はじめに

伊達市噴火湾文化研究所（以下、研究所）は、市民と共に街の文化を掘り起こし、地域の文化を街づくりに活かそうと様々な活動をしています。何千年もの昔から、伊達という土地に人が暮らし始めて今日に至るまで、人々は、噴火湾を取り巻く自然と密接に関わりながら、独自の文化や歴史を形成してきました。このため、研究所が噴火湾の自然史に関する情報を収集することは、単に地域の生態系や動植物の歴史的変遷を明らかにするというだけでなく、人の文化や歴史を理解する上でも欠かせないものです。しかしながら、伊達の自然史記録は、これまで行政規模ではほとんど残されてきませんでした。

当研究所は、主に市の文化財を扱う業務が多いため、研究所の活動に参加している市民は、歴史分野のボランティアが多いのですが、伊達の自然に関心を持ち、毎年、独自の自然観察会などを積極的に展開している自然分野のボランティアも多くいます。

こうした自然分野のボランティアが、地域の自然を学ぼうと、毎年、冬季に主催している「冬の自然勉強会」の場をお借りして、2012年12月16日に自然史標本の作製体験をするワークショップを開催しました。一般の方にはあまり馴染みのない世界ですが、自然史博物館では、収集された動物の死体を標本にし、「自然の証」として展示や研究を行っています。自然史標本といっても植物から動物まで、色々なものがありますが、今回は、野生動物の頭骨標本を一般市民に作製してもらうといった内容で行いました。本稿では、伊達市という地域のもつ魅力を再考しながら、ワークショップの内容を紹介したいと思います。

2. 噴火湾の自然史標本の文化財的価値

そもそも一般の方にあまり馴染みのない自然史標本には、いったいどのような価値があるのか。伊達という地域の背景とそこに内包する街づくりの可能性とともに考えてみたいと思います。

北海道でも温暖な地域として知られる噴火湾の東岸に位置する伊達市には、国指定史跡北黄金貝塚に代表される縄文文化や有珠モシリ遺跡に代表される続縄文文化に加え、有珠湾沿岸に繰り広げられた中近世のアイヌ文化があります。また、明治期には武士の移住と開拓の歴史など、多くの歴史遺産を有している街です。

さらに、伊達市は、2009年８月に日本で初めて、世界ジオパークとして認定され、洞爺カルデラや有珠山などに代表される地質遺産を有し、学術的にも観光資源としても多くの見どころがある地域です。

写真１　噴火湾とジオパークに囲まれた伊達市

これまで伊達市では、歴史遺産に関する資料の収集や研究は多くなされてきましたが、歴史や文化の基盤となる地域固有の自然情報の収集はほとんどなされておらず、自然史標本の蓄積は皆無です。

自然史標本は、地域環境の変化など地域の自然の特徴を明らかにするだけでなく、地域の文化とも深く関わっているものです。例えば、伊達市には市の文化財に指定されている記念樹がありますが、いずれも樹齢100年を超える老木であり、樹としての生物学的な価値だけでなく、開拓時期に植えた経緯などの歴史情報も併せ持っています。また、東日本大震災で被災し、ふるさとの記憶が復興の力になるとの願いも込めて救出された自然史標本の中には、単に過去の東北地方の自然環境を示すだけでなく、人間社会を含んだ「地域文化」の記録を示す資料が多く救出され、標本は学術的価値のみならず、文化財的価値をもっていることが改めて明らかとなっています（佐久間 2011）。

こうしたことからも、自然の記録を収集することは、これまで伊達市で多くの情報が蓄積されてきた考古学や歴史学との関連性も深く、こうした他分野

との学際的研究にも寄与するものです。実際、考古学の分野では、遺跡から出土する多くの動物骨を同定する際、現生の動物標本が不可欠であり、一方で、動物学の分野においても、出土した動物骨は、過去にその動物が生息していたという絶対的な証拠となることから、自然史の解明にも役立つものであり、考古学と動物学は相補的な関係にある分野なのです。こうしたことから、すでに伊達市で開拓されている地質遺産や歴史遺産などの観光資源に、自然遺産の知見を加えることは、地域の魅力をより強化し、地域活性化にもつながるものと考えています。

さらに、近年は、学校教育の現場においても、本物の骨や化石などの標本を実際に触れながら学習を行う教育が全国的に展開されてきており、博物館の中での活用だけでなく、地域の資源として多様な活用が期待できます。

日本の自然史標本は、国の法律や地方の文化財保護条例でも、ほとんど保護される対象になっておらず、対象の多くは野外の巨木や天然記念物です（佐久間 2011）。伊達市の文化財保護条例もこの例外ではなく、これまで伊達市では自然史情報を残すという下地がありませんでした。

3. ワークショップの開催

伊達市で自然情報を残す体制づくりの第一歩として、2012年12月16日にワークショップ『動物の頭骨標本を作ろう！』を開催しました。参加者には事前に本講座の目的と頭骨標本の作製方法、感染症や鳥獣に関する留意点について説明を行った上で、実験室にて標本作りを行いました。

本講座の周知は、研究所ホームページや市の広報誌などで行い、定員10名の事前申込み制としました。これは、実験室のスペースと資料の数に限りがあったためです。初めて実施する講座であるため、市民がどのくらい関心をもって申し込んでくれるか、不安もありましたが、定員以上の応募があり、当日は見学者を含めて37名での実施となりました（写真2）。

事前に申し込みのあった参加者は、幼児３名（親子で参加）、市内の高校生３名、20代から70代までの一般成人11名と幅広い年齢層で、これまで研究所に関わりのあった方だけでなく、市の文化行政に関心のなかった新規参加者も多く見られました（写真３）。

頭骨標本の作り方には色々な方法がありますが、今回は、皮を剥いだ頭部を煮沸し、肉を骨から取り除く方法を用いました（詳しくは『標本の作り方－自然を記録に残そう』（大阪市立自然史博物館編著）などを参照）。

使用した動物の頭部は、市内などで有害駆除により捕獲され殺処分されたヒグマ、エゾシカ、アライグマ、タヌキといった野生動物に加え、市内の精肉販売会社オオヤミートから提供されたブタを用いました。

感染症のリスクを考慮し、体験者には研究所が用意したマスク・手袋・白衣着用をのもと、ヒグマを除いて、使用した頭部は、スタッフにより事前に煮沸処理したものを用いました。体験者は、ピンセットなどで肉を取り除いた後、細かい肉片を取り除くために歯ブラシで骨を洗う作業を行いました（写真 4）。

写真２　ワークショップ会場のようす

写真３　幼児の参加 －ブタの頭骨処置を行っている－

写真４　歯ブラシで骨を水洗いしている親子

写真５　生物部に所属する市内高校生

また、ヒグマの頭部は、高校生３名が皮を剥ぐ作業から行いました（写真5）。

終了後のアンケートでは、標本作製の過程を実際に体験できて楽しかったなど、非常に多くの好評を得ました（表 1）。幼児が１名、会場の臭いが耐えられず、途中辞退となりましたが、その他は、体験前は気持ちが悪いと不安に思っていた方も、やってみると意外に楽しかったという感想をいただきました。

表１. ワークショップ参加者の感想と要望

アンケートの内容
【幼児】
・楽しかったよ
【高校生】
・動物の頭の構造を知れたのですごく勉強になった
・すごい臭いがしたけど、標本作りが初めてでとても面白かった
・すごく楽しかったし、頭の筋肉っておもしろいなぁと思った
【一般成人】
・動物の皮の剥ぎ方を覚えたいです
・意外に楽しかったです
・剥製作りや植物のＤＮＡを調べたりしたいです
・気持ち悪いこともなかったし、面白かったし、良い体験ができた
・臭いも気にならず夢中でできた。やってみるのが一番だと思った
・作製を最初から最後まで体験したかった
・楽しかったです！
・楽しかった。今後も機会があればやりたい
・勉強になった。
・とにかく凄く勉強になった！おもしろかった
・もう少し広い部屋で、換気扇などがあればいいのですが‥
・新鮮な体験でした。ありがとうございます
・子ども連れもいていい雰囲気ですね
・伊達でこの企画をやっていることに驚きました
・完成まで月１回くらいの企画だと面白いかと思う
・学生含めて年間通してできるといいですね
・大型のエゾシカやヒグマをみんなで完成までできるといいですね
・始めて見る光景ばかりで、とても刺激的でした！楽しかった

また、９割以上の方が、今後も標本作製の機会があればボランティアとして協力していいという回答があり、これまで研究所の活動に参加していなかった市民を自然分野の事業を実施していくことで、もっと街の文化事業に取り込めることが分かりました。「作製を最初から最後まで体験したかった」「全身骨格の作製や鳥類の仮剥製の講座を完成まで月１くらいの企画で実施してほしい」との熱い意見も多く、予想以上に解剖や標本作製に関心のある方が多いことが分かりました。

このワークショップを通じて、地域の自然史資料の収集の意義を市民に普及し、広く関心をもってもらうことで、市民と行政の自然に関する情報ネットワークを構築するねらいもありましたが、達成の第一歩として成功しました。

４. みんなで残そう！地域の自然史記録

研究所では史跡北黄金貝塚公園と伊達市開拓記念館の庭園を主なフィールドとして、自然分野のボランティアが毎年、色々な活動を展開しています（前者は、縄文スクスク森づくりの会、後者は、だて記念館びおとーぷクラブ）。主な活動内容は、植樹やビオトープづくりですが、これ以外に野外での自然観察会や勉強会を開催するなど、年間を通して多様な活動を行っています。こうした会員の中には、専門的な知識や資格を持った専門家が沢山おり、2004年から年５回開催している冬の自然勉強会では、これまでに、植物、昆虫、動物、鳥類など、幅広いジャンルでの講演を実施してきました。今後は、こうした市民の知識や技術をもっと街づくりに活かしてもらえるように、研究所では様々な博物館ソフト事業の開発をしていきたいと思います。

また、今回ワークショップで使用した動物の死体の多くは、市の環境衛生課から提供された有害駆除の個体を用いました。近年、道内ではエゾシカやアライグマによる農業被害や生態系への影響が深刻化していますが、伊達市でも毎年多くの鳥獣被害が発生し（図 1）、特にアライグマによる被害は増加傾向にあります。

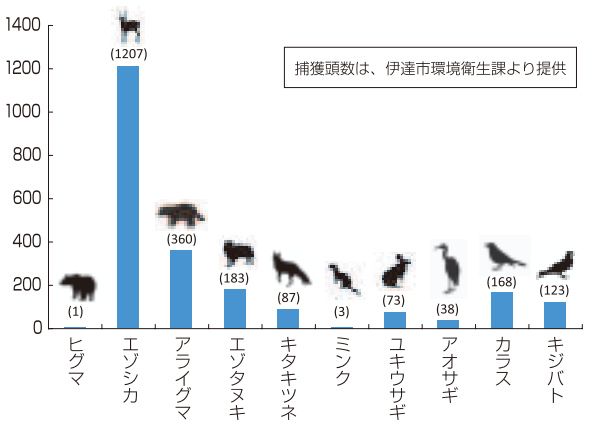

図１. 平成21年度～平成23年度に伊達市内で有害駆除等により捕獲された鳥獣の３ヵ年累計頭数

動物の死体は、標本として活用したり、食害など鳥獣被害の実態を把握する上でも有用な情報をもたらすにもかかわらず、殺処分された死体の多くは、ゴミとして捨てられている現状にあるのです。

今後は、動物の死体を、博物館や学校教育の現場で有効活用できる体制を作っていかなければならないと考えています。また、地域で起きている鳥獣被害について、博物館などで現状を正しく伝えていくことは、将来的には、市内で深刻化する農業被害などの野生動物問題を減らすことにもつながると考えています。

地域住民が動物の死体を収集し、博物館標本として作製から保管までの過程を行っている先駆的な事例として、「なにわホネホネ団」があります。なにわホネホネ団は、大阪市立自然史博物館を拠点に活動する市民サークルで、小学生から60代までの百十数名の団員が活動し、作製だけでなく、博物館に動物死体を集める意義についても啓発を行っています。このため、なにわホネホネ団の活動を見た団員以外の市民が動物死体を発見した場合、博物館に提供するといった意識が広がり、全国的に注目されています。

今回のワークショップを継続して実施することで、伊達においても、市民が地域の自然情報を残していける下地を作っていきたいと考えています。

どの地域でも言えることですが、地元の人は、その土地固有の自然や文化を当たり前のものとしてその価値や魅力に気付いていないことがあります。

例えば、昨年度から、北海道では珍しい柿の実を用いた「柿渋プロジェクト」がスタートしましたが、子どもの頃から街中で普通に見ることのできる伊達の柿は、金銭的価値のないものだと地元の人は考えがちなのです。

自然についても同様で、噴火湾周辺は自然の宝庫です。より多くの市民に地域の自然に関心を持ってもらうことは、将来的には市民が地域の自然を守り、地域資源を活かした街づくりにもつながるものと考えています。市民と一緒に地域の自然を未来に残し、地域の資源として活かしていける道を模索していきたいと思います。

【謝辞】
ワークショップ開催にあたり、ご参加頂いた皆様及び冬の自然勉強会実行委員会の方々にご協力とご支援を頂きました。また、資料の提供には、オオヤミート様にご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

【参考文献】
佐久間 大輔, 2011『博物館と生態学（17）
自然史系資料の文化財的価値－標本を維持し保全する理由－, 日本生態学会誌, 61:349－353
大阪市立自然史博物館編著, 2007『標本の作り方』
自然を記録に残そう, 東海大学出版会

『伊達の自然』コラム①

善光寺自然公園におけるエゾタヌキの糞内容物

伊達市噴火湾文化研究所 学芸員　羽馬　千恵

2012年３月に善光寺自然公園でエゾタヌキの「ため糞」を見つけました。ため糞とは、１カ所にまとめて糞をするタヌキの習性です。いわば、タヌキ同士の「共同トイレ」で、個体間の情報交換の場であるともいわれていますが、その生態はよく分かっていません。動物の暮らしを知る上で、何を食べているかを明らかにすることは基本の一つですが、日本のように森林に生息し、夜行性である動物の食事風景はめったにお目にかかれません。そこで、直接観察が難しい場合、糞や胃の中身から間接的に調べる方法がいくつかあります。ちょっと汚い話ですが、ウンコの中に残された未消化物をメッシュ上で水洗いして調べるのです。善光寺のため糞場から、いくつか糞塊を持ち帰り、残渣を調べてみました。出てきたものは、ヤマブドウの種、甲虫の外骨格、哺乳類の骨などです。タヌキは雑食性で嗜好性がないため、特に何かを選択して食べているわけではありません。糞の中身から、善光寺自然公園で、一生懸命に餌を探して拾い食いしている姿が思い浮かびます。ぶんぶく茶釜などの昔話やスタジオジブリの映画『平成たぬき合戦ぽんぽこ』からも分かるように、タヌキは昔から人里近くに暮らす身近な野生動物です。しかし、北海道の人にとってはあまり馴染みがないようで、よく「キツネは見るけどタヌキは北海道にいるの？」と訊かれます。日本には、津軽海峡を境に北海道にエゾタヌキ、本州以南（南西諸島は除く）にホンドタヌキの２亜種がいて、北海道では山や里山に生息が確認されています。伊達市でも、善光寺自然公園のような身近な場所に、こっそりと暮らしているのですよ。

善光寺自然公園のエゾタヌキのため糞

教育実践
【絵　画】

ロシア雑感

広島市立大学芸術学部　准教授　森　永　昌　司氏

Ⅰ

もう４年も前の話ですけれども、文化庁の新進芸術家在外派遣研修の面接の時に、多勢の文科省の審議官の方達に囲まれて、「先生は、最近子供の美術教育に取り組んでおられるようなのですが、日本の小・中学校の美術教育について、先生のお考えをお聞かせください」と、いきなり問われたことを、時々思い出すことがあります。私がロシアに行くことと関係がないように思われたのですが、これは、業績調書に書いていた北海道伊達市での『画伯にチャレンジ』での活動が大きかったのかも知れません。私はロシアに行って何をしたかったのかと言うと、ロシアの専門教育に至る美術教育の現状を調査したいという計画を献辞しておりましたので、研修後に想定しうる答を、先に求められていたのだということが、今となっては理解できるのですけれども、ロシアでの成果と日本の美術教育の関連性って…？　自分には答えられないと思いつつも、咄嗟にどのように答えたかと言うと、「大きな問題なので、私には的確には答えられませんけれども…」と付言して、「学校で美術を教えることには限界があると考えております」と、自分が学生時代からの持論を申し述べた訳なのですが、「なので、あらゆる機会を通して（子どもたちが）美術に親しむ機会を作らなくてはならないと考えて、いろいろ取り組んでおります」と。「それは公教育を否定するものではありませんけれども…」と言いかけたのですが、矢継ぎ早に『先生はそうおっしゃいますけれども！』と、しばらく質問責めに遇いながら冷や汗をかいたのを覚えております。要するに「子供の美術」を問題にされてしまって、現状の解決策を問われる羽目になった訳ですけれども、正論を言ったつもりだったのですが「専門家の人たちに、ちょっと言い過ぎたかな…」などと思い返しながら、申請を却下された気持ちでいた訳なのですが、何が幸いしたのか、2010年度の審査に合格して、私はロシアのアカデミーに一年間お世話になることになったのでした。

Ⅱ

私と北海道との縁は、20年程前に遡るのですが、東京藝術大学の大藪雅孝先生の隔年のゼミに、多摩美術大学の米倉守先生（故人）の学生たちと、私ども広島市立大学の野田弘志先生の学生たちが合流して、参加させていただいたのが最初なのでした。当時は、壮瞥町の「森と木の里センター」を拠点に自由制作を行うという「北海道ゼミ」という形式で、総勢80名の学生たちが参加するいわゆる「ふつうの合宿」だった訳なのですが、学生達にとっては有意義な場となっていたのを覚えております。お陰さまで毎年のように、私は北海道を訪ねておりますが、伊達市の武者祭りで使用する山車に絵を施すという助成をいただいたこともありましたし、文化研究所が設立されて、そのサポートをさせていただくようにもなり、何だか不思議な縁を感じております。それは『芸術村』を実現したいという、アートビレッジ実行委員会の人々の思いを看過しては始まらないような、伊達市でしか起こりえない特別な情況が生み出したものだからに相違ありません。研究所が開設されて以来、アートビレッジのコーディネーター

写真１．だて噴火湾アートビレッジ『画伯にチャレンジ』
－「ダンボールで作製した家の色塗り」のようす

写真2．だて噴火湾アートビレッジ『画伯にチャレンジ』
－「色についての講義」のようす

の役割を仰せつかり、私は年に一度ですけれども北海道を訪ねており、低学年向けのワークショップを担当させていただくようになりました。この取り組みが将来に亘って受け継がれて、受講した子どもたちの中から美術に親しむ人材が育ち、伊達市にとっても有益な実を結ぶようになることを願ってやみません。

昨今、中学校でも美術を選択制にしてはどうかという答申が出されており、義務教育に於いて、筆を持って絵を描くという美術の時間も、一学年のうちに一度、あるかないかというような情況に、日本中の小学校でもいずれそうなるのではないかと予測しているところです。絵を描くようなことは（音楽もそうですが）好きな人だけがやればよいという、専門家に任せておけばよいという風潮は、文化国家にふさわしくないと思えるのですが、専門家をどのように育てるのかという難問に日本は直面していくことになるのではないかと直感している次第です。

Ⅲ

『考えるヒント』という小林秀雄のエッセイ集があります。私は中学生の頃から本が好きで、自分が生まれた年の同じ月に刊行された本だということもあって、その題名から、自分に与えられたヒントだと勝手に思い込んでしまい、中学生の頃、意味もわからずに何度も読み返していたのを覚えています。『考えるヒント』は1980年の第４集までが刊行されており、私が学生の頃は、よく夏休みの課題図書とかにも指定されていたという、現在でも必読書なのではないかと思われるのですが、その『考えるヒント』の中に、「ネヴァ河」という一篇の短いエッセイがあります。私のロシア好きのきっかけにもなった文章なのですが、ドストエフスキイとソルジェニーツィンの対比のことが書かれていたのが印象的でした。私が中学生の頃は、ソルジェニーツィンの処女作『イワン・デニーソヴィチの一日』が、1970年にノーベル文学賞を受賞したばかりで、彼が1974年にソ連を追放されるという弾圧を受ける前後のことなので、まだ冷戦のあった時代、『考えるヒント』には人類の未来に対する批評精神が含まれているかのようで、不思議な感銘を受けたのを覚えております。オーバーな言い方かも知れませんが、批評精神が芸術を支えており、芸術家はその存在を忘れてはならないという考えを持つきっかけにもなったように思われます。

あわせて、高校生になって暫く経ってからのことなのですが、小林秀雄の文芸批評『Xへの手紙・私小説論』や『ドストエフスキイの生活』など、図書館で借りて読むようになった訳ですが、その十数年前の文芸批評にロシア文学の深層を書いていた小林秀雄という人は、かなり「先見の明」のあった人物なのではないかと、私は今でも思っております。

Ⅳ

ロシアのことを調べていると「美が世界を救うであろう」というドストエフスキイの言葉によく出会います。「美が世界を救う」というテーゼは、ドストエフスキイが言ったというよりも『白痴』という小説の中で、ムイシュキン公爵の言った言葉として、いろいろな文書に引用の見られる有名な言葉になっている訳なのですが、その単純なテーゼが、革命前夜のロシアに於いて、芸術家たちを鼓舞し、強い影響を与えたのではないかと言われております。1990年の北海道立美術館で開催された『19世紀ロシア絵画展』のカタログに、ロシア美術の水脈について同様の記述が見られます。

「世界を救う（であろう）美」が、革命の原動力となったというのは言い過ぎかも知れないけれども、ドストエフスキイの生きた時代のサンクトペテルブルクの人々にとって、彼の小説は現実以上の意味を持っていたのかも知れません。言わば、人々に真実を提示するという意味で、芸術家はその使命感に燃えていたのではないかと思われます。日本では1910年代のロシア革命の影響下に於いて、「白樺

写真3．凍ったネヴァ河のようす（ロシア・サンクトペテルブルク）

ら時間ばかりが経ってしまいましたけれども、気がつけば、私はサンクトペテルブルクに度々、足を運ぶようになっている訳なのでした。

V

研修が決まって、アイロフロートの飛行機の中で『考えるヒント』を久しぶりに読み返してみました。ロシアについて理解をしてきたつもりだったのですが、研修期間中は何度も「ネヴァ河」のようすを確認したくなってしまいました。一年中眺めていると、不思議な感動が生まれてきたように思われます。ソヴィエトが崩壊した今だからこそ、ラスコーリニコフが大地に接吻したという、世界的な文豪の提示した世界観に近づけたような気持ちにもなりましたし、残された余生は、世界を救うという美のテーゼを形にしていけるように、ドストエフスキイと約束をしてきたようにも思われたのでした。

私は若い頃から幸運にも、沢山の美と出会い、芸術に親しむ人になりました。確かに「美」が存在し、その美を心から歓び、私たちの中に在ることが「救い」になるのだということを信じて、これからも、伊達市のアートビレッジで実現していけるように取り組んで参りたいと思います。

派」と呼ばれる文学者たちが自然主義から人間主義へという風潮を生み出したと言われているのですが、「美は世界を救う」というテーゼは、日本では信じられなかったのではなかろうかと。「大正デモクラシー」という言葉がありますけれども、それは戦後に成立した造語であり、あたかも芸術運動があったかのような位置付けも再検証が必要なのではないかと私は考えております。日本の近代化に於いて見落として来たものについて、つまり「ヨーロッパの受容＝近代化」という図式に変更を求めたいという思いに駆られるようになってきて、では日本はどうなのか…？と。本来の芸術のあり方を考えなが

Newsletter【噴火湾文化】第７号

●編集・発行　伊達市噴火湾文化研究所
〒052-0031　伊達市館山町21番地５
TEL. 0142-21-5050　FAX. 0142-22-5445
E-mail　bunka@city.date.hokkaido.jp
URL　http://www.funkawan.net/index.html

●印刷　(有) 村上印刷
〒052-0026　伊達市錦町95-1
TEL. 0142-23-2625　FAX. 0142-25-2459

2013年３月31日発行